

編集後記

現代の医学は日々急速に進歩している。それにより歴史上の医学の見え方も変わりつつあると、この頃よく感じている。小川鼎三先生の名著『医学の歴史』が刊行されたのは1964年、今から50年以上前のことになるが、かつて愛読したこの本を久しぶりに手に取ってみると、なぜかしら古めかしさを感じてしまう。それは何よりも、この50年間に積み重ねられてきた医史学研究により、歴史上の資料が数多く収集・紹介され、歴史上の事実に対する新しい視点が提出されてきたからであろう。日本医史学会総会での発表や、日本医史学雑誌に掲載された論文は、この医史学の発展に少なからず寄与している。今後とも、日本医史学会の会員各位が医史学の研究を深めて、総会や雑誌の場を通して発信していただきたいと願うものである。

もう一つ、医学・医療のあり方が大きく変わったことも、歴史の見方を少なからず変えているように思う。現在の医学では、病気は必ず診断され治療されると期待されているが、私自身が医学生であった40年ほど前の医学では、病気は不確かなもので診断・治療の方法も限られていた。私がここ数年にわたって研究していた18世紀以前の医学では、古代以来の体液説を継承して、尿診で診断し瀉血で治療をしていた。ある時代の医療水準が、現在から見て低いものであったとしても、現代につながる医学の歴史の一頁である。古代から現代まで、医学が研究を積み重ねて人体と病気の理解を深め、診断と治療の技術を洗練させてきた歴史の道筋が、人類の発展の歴史の一部として描かれることを願っている。

(坂井 建雄)